

目指す学校像	人生100年時代の土台づくりとして「世界と向き合い、ゆめをもち、発信力のある子」を育成するためにチームで支援する学校
重点目標	1 20年後のエージェンシーを育む真の学力の育成 2 ゆめが安心して語り合える居場所を保証する教育支援・相談体制・生徒指導の充実 3 地域と児童が共に元気になるコミュニティ・スクールの新展開 4 誰もが居心地のよい (Well-Being) 学校をつくる教職員の資質向上と働き方改革の推進

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学校自己評価			年度評価		学校運営協議会による評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	(現状) ○校内研究で PBL 型授業研究を進め、学びの楽しさを実感できる場面が増えてきた。 ○R5 全国学力・学習状況調査の結果は前年度より大きく上がった。 ○R5 市学習状況調査では各教科平均点が 12 項目中 7 項目 (58.3%) で市を上回った。 ○「外国のことをもっと知りたい」と思う割合は 6 学年中 4 学年 (66.7%) が市平均より低い。 (課題) ○短時間で中・長文の文章を読み取り、問題の意味を理解したり、100 文字程度の文章で表現したりする力に課題がある。 ○学びの楽しさを実感できない児童への支援が必要である。 ○外国への関心が学年によってばらつきがある。	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ楽しさを実感する探究型授業の実現とワクワクする教科横断的な教育課程の編成 ・主体的・対話的で深い学びに必要な基礎学力の向上 	①全職員が PBL 型授業、探究型授業の研究をし、管理職が全学級を計画的に参観し、ICT を活用し、学びの楽しさを実感する授業改善が進んでいるかの視点で指導・評価する。 ②夢に繋がるワクワクする事業を実施 (金融経済教育/プログラミング教育/天体観望会/SDGs 特別授業/外部講師の招致/世界に目を向ける活動)	①市学調で教科の「好き」の割合が同一集団で 17 項目中 6 項目で昨年度以上になったか (昨年度 6 項目が下がった)。 ②市学調で「外国のことをもっと知りたい」が全学年、市平均と同程度となっているか。	①今年度市学調の結果では、各教科の「好き」の割合は同一集団で 17 項目中 6 項目が昨年度以上の結果となった。 ②今年度市学調の結果では、6 学年中 3 学年が市平均以上の結果であった。残りの 3 学年は市平均との差が 4~10 ポイントと、差が大きい結果となった。しかし、学校評価「世界や外国について興味がでてきた」における肯定的回答割合と比較すると、全学年市平均以上もしくは同等の結果であり、学校としての取組の方向性は合っていると考えられる。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・大幅な減少が見られなかったのは、学年や学級で取り組んでいる授業改善の成果だと考えられる。今後も、主体的な学びの実践が継続できるよう研修等を進めていく。 ・全校で世界に目を向ける取組を実践しているが、徐々に成果として表れてきている状態である。来年度は、より児童の興味・関心が高まるような実践を行っていく。 	世界に目を向ける取組では、子ども達の視野の広がりを感じた。給食献立に世界の料理が入っていたり、委員会の外国紹介があったりといった、身近なものから世界に目を向けられたことが良かったのではないかと、市学調の結果から、各教科平均正答率がおおむね市平均を上回っているのは、よいことである。調査問題や結果の分析を行い、授業改善につなげるなど日ごろの先生方の取組の賜物だと言える。子ども達のタブレット使用については、扱いが雑なので継続して指導してほしい。
2	(現状) ○いじめの早期発見、早期対応、組織対応の取組は定着してきた。 ○市学調の「自分には良い所がある」の質問に、6 学年中 3 学年で市平均を下回った。 ○学級で安心して夢が語れる児童は 48.7% である (4 月現在) (課題) ○成功体験を多く経験させ、自己肯定感を高めていく必要がある	<ul style="list-style-type: none"> ・安心できる環境づくりと一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校内体制の充実 ・自己肯定感を高める取組 	①生徒指導・教育相談に係る校内委員会で ICT を活用し、組織的な支援、相談を具体的に出し合い、実践する。 ②保護者に向けて懇談会や HP、各種発行物等を通していじめに関するメッセージを発信し、いじめ対応に関する方針について周知を図る。	①教員アンケートでいじめや長欠に関する校内委員会での組織的な対応で、肯定的な回答が 100% を維持できたか。学校評価 (保護者) でいじめ対応に関して肯定的回答昨年度以上 (84.7%)。 ②学校評価アンケートで保護者、児童のいじめに関する項目が昨年度 (保護者 84.7%、児童 95.7%) と同程度以上となったか。	①学校評価 (教職員) において、いじめや長欠への組織的対応への肯定的回答は 100% であった。また、学校評価 (保護者) における肯定的回答は 82.8% と昨年度より 1.9 ポイント減で有意差はなく、昨年度と同程度であった。 ②学校評価のいじめに関する項目における肯定的回答は、保護者が 82.8%、95.2% と昨年度と同程度の結果であった。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・校内においては、いじめを認知後、早急に管理職へ伝達し、組織として対応することが徹底できた。次年度以降も継続していく。昨年度同様、年度当初の懇談会や全校集会の際に、本校のいじめに対する対応について共通した内容を徹底して伝えた。しかし、周知しきれていない部分があることから、学校のいじめに対する毅然とした対応を引き続き周知していく。 ・目標は達成できなかったが、6 学年中 4 学年は市平均以上の結果であり、取組は間違っていないと考えられる。児童理解を今後も十分に行い、より適した支援等を継続していく。 ・継続的に活用する児童はいなかったものの、支援を必要とする児童に対して適切な支援ができるよう環境整備を継続していく。 	自分のことを相手に表現するには、子ども達が自己肯定感を高めていく必要がある。また、友達の良いところ気づくことも大切である。親が自分の子どもを褒められないという現状も見られる中で、先生方に通知表等で子どもを褒めてくれていることによって、親が子どもの良いところ気づくことを続けてほしい。いじめや不登校については、件数が増えている現状が理解できた。継続的・組織的な支援・指導に努めてほしい。
3	(現状) ○学校運営協議会の熟議で、地域の教育資源である「東大宮音頭復活プロジェクト」を教育課程に位置付け、全校で取り組んでいる (3 年目) ○SSN が再始動 3 年目でお互いの活動の見える化を進めている ○学校の様子をブログを通して定期的に地域に発信している (課題) ○子どもたちが主体的に地域に関わろうとするまでには至っていない。 ○自治会等の加入者の高齢化が進んでいる	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が地域に主体的に係る支援 ・目指す児童像を地域全体で共有するための ICT の活用 	①CS 主導の東大宮音頭復活プロジェクトと特活部とがコラボし、児童主体のプロジェクトチームを発足させ、地域の盆踊り等のイベントに積極的に係れるよう自治会との橋渡しを行う。 ②SSN の活動が共有できるホームページを充実させ、各団体が学校応援団として機能する。	①2 地域以上の自治会等イベントにて本校児童による運営場面があったか (新規)。 ②SSN による学校支援活動が新規に行われたか。保護者アンケートで SSN、CS の認知度 (昨年度 77%、82%) の肯定的評価が昨年度以上となったか。	①地区の夏祭りにおいて、高学年を中心とした「ミヌマーズ」がクイズやダンス等、夏祭りの運営に関わることができた。 ②今年度 SSN による学校支援活動として、各自治会の夏祭り運営への児童参加が実施され、大変好評だった。また、SSN 及び CS の認知度は SSN75.4・CS82.5% と昨年度と同程度の結果であった。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・児童と自治会で協力して地域の夏祭り運営に大きく貢献できた。今後は、さらに児童の活躍の場を地域とともに検討していく。 ・大きな変化はなかったものの、一定数の保護者からの認知は見られた。各団体の取組等をさらに周知し、認知度の向上を図る。 	学校・地域の関係が大きく変革した 1 年だったように思う。子ども達の関心等がもっと地域に向くような教育もある部分では必要である。そういう意味では、「ミヌマーズ」の取組に学校・地域・保護者が連携して支援・見守りができたのは良かった。ミヌマーズが関わったイベントを通じて、子ども達の「自らやろうとする力」が育ってきたことを感じた。子ども達の動き自体も素晴らしかったので、こうした活動の発信も含めて、いい取組を継続してほしい。
4	(現状) ○ICT の活用や探究的な学びについて、意欲的な教員が多い。 ○業務改善が進み、Well-Being の意識が高まっている。 (課題) ○成績処理に負担感を感じている職員が多い。 ○時間コストを意識している職員は少ない	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の ICT 活用能力の向上と子どもたちと向き合う時間を確保するための働き方改革 	①指導要領、通知表の記入方法を検討し、成績処理の負担感を軽減する。 ②事務室主導で給与と在校時間から時給を算出し、時間コストを意識した業務を行う。	①成績処理の負担感が減少しているか (昨年度 50% の職員が負担に感じている) ②時間コストを意識して働くようになった、または在校時間が減った、が 80% 以上だったか。 (新規)	①成績処理の負担感軽減策を全て実践し、職員の肯定的評価は 100% である。負担に感じている職員は 35% になり減少した。 ②91% の職員の「時間コスト意識」が向上した。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も職員の負担要因を明確にし、働き方改革をより一層推進していく。 ・「時間コスト」をより意識した働き方ができるような取組を検討し、全体へと周知していく。 	デジタルツールの導入によって、教職員の負担軽減につながっているのは、今後も継続してほしい。一方で、それによって保護者にお願いくることも出てくるので、行事アンケートや学校評価で保護者の意見をしっかりと聞きながら、進めてほしい。